

第4回新鋭俳句賞

正賞

「蟻眠る」

渡部 有紀子

蟻眠る

初御空胸に真白き矢を抱く
飛込みし鳥の重さや花万朶
春シヨール母美しく老いにけり
我が手相かくも複雑春の風邪
花篝夜は西行の衣の色
体内の道は一本聖五月
母の日のものやはらかに煮上がりぬ
芍薬の散る一片のなほ真紅
梅雨寒の達磨にしかと膝小僧
闇に身を逆さに委ね蟬生まる
朝焼や桶の底打つ山羊の乳
山裾の水の整ふ大植田
一粒の雨より興る草いきれ
蟻塚の奥千萬の蟻眠る
渡り鳥折紙にある山と谷
敗荷のしかと立ちたる水の闇
落蟬の大きいなる翅濡れてゐる
竹節虫の機械仕掛のこの歩み
子のありて夫婦の孤独ちちろ鳴く
今朝の冬光ついはむ鳩の群
縄跳や肩幅に空立ちあがる
冬木の芽つぶやく声は母に似て
てのひらの窪みの蒼さ冬ざるる
あやとりや互ひに触るる膝の骨
返信をしない愛あり薪を割る
マスクして街の孤独を飼ひならす
靴音の凍てて羅馬の石畳
狐火は女のまなざしと思ふ
狼の影長くして大雪原
考へる人の拳に蝶凍つる